
連鎖??次元バランサーシリーズ??

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連鎖???次元バランスシリーズ??

【Nコード】

N5706U

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

わたしは湖宮明咲^{こみやあさぎ}季。高校3年生。

お兄^{あに}いが大学で入ってる探検サークルに参加するよう『自然』からささやきを受けて、やって来たのは7時間もバスや電車に揺られて着いた「往絡山^{おうらく}」の温泉地。

そのサークルにはもう1人、わたし以外の部外者がいた。

到着（1）

都会から離れ、神秘の匂いがたちこめる大いなる自然の中へと進む列車が、やっとその入り口に差しかった。

夕方になって少しは涼しさが戻ってきてるけど、昼間の暑さはまだ地面からゆっくりと立ち昇り、冷房も付いてない車内はじっとり蒸せ、窓から吹き抜ける風にわずかな救いを求めている。

遠かったあゝ。

しゃべるのも疲れたゝ。

電車のイスが固くて体イタイゝ。

「ほゝら、やっと見えてきた。あれが入った者は2度と出られないという伝説の残る往絡山だ^{おうらく}」

周りのみんなにお兄いが説明するけど、今はどうでもいい。

朝出発してからもう7時間もバスや電車に揺られてる。わたしは、とにかく体伸ばしたゝい。

あゝあ。やっぱりこんなとこ付いてくるんじゃないかな？

わたし？ わたしは湖宮明咲^{こみやあさぎ}季。高校3年よ。

わたしのお兄いは大学で探検部なんてあやしいサークルに入っちゃって、おまけに部長なんてもものになっちゃってる。

と言っても部員はたったの6人、そのうち半分は幽霊部員だから実際は3人だけ。

ずっと昔にサークルができた当時はけっこうディープだったらしいけど、今じゃ探検と称して山奥の温泉旅行に出かけるくらいしかしていない。

この探検だって、なんかの伝説が残ってるってのは表向きで、大

学の子誘って古びているけど土地の美味しい料理出してくれる旅館に行くのが本当の目的なの。

今回の探検に参加してるのは、わたしを合わせて7人。

お兄いと部員の土方さんと矢吹さん。

女の子は益原さんと杉田さん。

それにもう1人……「往絡山に行くなら、ついでに交ぜてもらえないかな」って、部員じゃないけど今日の朝になって同行することになった犬澤修仁さん^{いぬさわしゅうじ}。

?? 終点、往絡山です??

車内アナウンスがやっと降りる駅をつげた。

「よし、到着だ。荷物下ろすぞ」

お兄いがみんなに声をかけると、半分グツタリしていたみんながホッとしながら動き出す。

だけど犬澤さんだけはキビキビ動いてる。

この人ってば、一緒に来てるのに、少し離れた場所に座って出発から今までずっと本を読んでいた。

お兄いたちが話しかけても読んでいる本から少し目を離して生返事しか返さないし、お菓子やジュースも「いらないよ」と言うだけで、ぜんぜん輪の中に溶け込もうとない。

愛想悪〜い!!

だけど、なんか、こう……惹かれるものがあるのは何だろう?

「犬澤ってあんなに感じ悪いやつだったか?」

「私同じ講座だけど、普段はあんなじゃないのに。おかしいな?」

「あいつなら往絡山の伝説とか、詳しく解説してくれるって期待してたんだけどな」

ナルホド。普段は愛想いいのね。わたしの直感は当たってるってことね。何かあったのかな?

駅に到着した列車はそのまま明日の始発になるらしく、あせらなくていいんだけど、大きな荷物に手間取ってるわたしを完全無視でお兄いたちがサッサと降りて行く。

薄情ものゝ！

「大丈夫？ 手伝うよ」

振り返ると、わたしが苦勞してた荷物を犬澤さんが軽々持ち上げる。

あれ……親切？

「お、お願いします」

「うん。まかせて」

さっきまでの愛想の悪さはどこにいったのかってくらい、にっこり笑う。

ま、荷物も重いことだし頼んでおこう。

到着（2）

「お兄いゝここから宿までどのくらい？」

わたしのことなんて、てんで無視してだらしく女の子と話すお兄い後ろから声をかけると、「ほんの20分も歩けばすぐさ」なんて言いながら、自分はしっかり女の子の荷物を持ってる。もう！！

「着いた着いた、ここだ」

そこは旅館っていうよりも、大きくて古い日本のお屋敷……古いけど立派って感じの建物だ。

だけど、こんなところで商売やっていけるのかな？

「わあ、なんかスゴク雰囲気あるゝ」

「そうだろ、ここは隠れた名所なんだ。今の時期はちょっと閑散としてるが、祭の時期には予約でいっぱいになるんだぜ」

益原さんが嬉しそうに言うと、土方さんが自慢げに胸を張ってる。「それに、何といっても郷土料理が有名だからな。楽しみにしてくれ。それより、とにかく中で休もう」

お兄いが笑って言うと、クタクタだったみんなに期待で笑いが戻った。

「こんばんわー」

中に入ると、お屋敷の雰囲気は残したままで、ちゃんとエアコンが効いてて涼しいゝ。

生き返るゝ。

「はい、はい、いらっしやいませ」

カウンターじゃなく帳場風に作られた受付からは、まさにこのお屋敷の雰囲気にとびつたりの背筋のシャンとしたお婆ちゃんが出てきた。

この人がここの女将さんのようだ。

「遠い所からよう来なされた、さあ、どうぞ」

笑って迎えてくれる顔は、何年も歳を重ねた重みと深さが感じられる。

「お部屋は3つでしたの、こことここ、それにこっちの部屋を使ってください」

隣り合わせの男部屋と女部屋、それとは少し離れてわたしの部屋……まあそのほうがお兄いもいろいろ都合があるんだろう。

「余ってればで構いませんが、もうひと部屋お願いできませんか、どんなところでもいいですから」

犬澤さんが女将さんに尋ねてる。この人っていつもいきなりなのかしら？ 団体行動向きじゃないわね。

「ここ2、3日はあんたがたしか来られんから、いくらでもあまっとなりますけえ。好きな部屋を使ってください」

「ありがとうございます。じゃあ遠慮なく」

わたしとお兄いたちの中間くらいにある部屋を指す。

「それじゃそちらの鍵を持ってきますので」

女将さんが立ち去ると、お兄いたちは自分に当てがわれた部屋に引き込んで行く。

「荷物、部屋まで持って行くよ」

犬澤さんがわたしに声をかけた。

あ！ そうだった、わたしの荷物持たせたまま。

「いいです、もうここですから」

「そう。はい」

ヒョイッと差し出された荷物を受け取ると、ズシッ！ うわ、重たい。よく平気な顔で持ってもらえるわ。そんなに力があるようには見えないんだけど……。

改めて犬澤さんを見ると、自分は使い古した小さなカバン1つしか持って来てない。

2泊3日、着替えとかどうするのかしら？

「お待たせしました」

女将さんが戻って来て、鍵を受け取った犬澤さんとわたしはそれぞれ部屋に入った。

あ、犬澤さんに荷物持ってもらったお礼ちゃんと言ってなかった。あとで言っておこう。

気軽な服装に着替えてからお兄いのいる部屋を訪ねると、もう部員の人たちと女の子は集まってお茶飲みながらくつろいでた。

伝説(1)

「来たか明咲季！」

お兄いが中に入るよう手をふる。

「明咲季ちゃん、こっちおいで」

杉田さんが隣を指して呼んでくれる。

「お茶飲む？」

言いながら湯飲みにお茶をさして出してくれた。

「ありがとう」

「湖宮、お前こんな可愛い妹がいたのに、よくもこれまで隠してくれてたな」

か、可愛い……？

マジ？ 矢吹さん。中学、高校とずっと陸上部で走ってたから、男っぽいとかカッコイイとしか言われたことなかったから、ちょっと……テレるわ。

「あ、矢吹君の好みなんだ」

「違うよ、違う」

速攻で否定するんかい！？ ま、分かってたけどね。

「おい、人の妹イジるなよ」

「さて、それじゃあここで、明日探検に行く往絡山の伝説を話しておこうか」

お兄いのツッコミ無視で、土方さんが大きな体を前に乗り出しながら、声をひそめて話し始める。

「犬澤さんいないけどいいの？」

「今日のあの調子じゃ呼んでも来そうにないし、そっとしておくほうがいいんじゃないか？」

矢吹さんが言うと、みんなも同じ意見らしくうなずく。それもそうね。

「オホン……それでは」

土方さんが仕切り直して話し始める。

??昔、往絡山にはイトナと呼ばれる恐ろしい妖怪が棲みつき、不用意に山へ入る者を次々獲って喰ったという。

もちろんその麓に暮らす人々、つまり今宿泊している旅館があるこの村の人々の多くがその妖怪に喰われ、人々はたいそう困り中には村を捨てて逃げ出す者もいた。

ところがある日、通りかかった旅のお坊さんが困っている村人の話を聞き、1人で山に入っていく、やがて山から恐ろしい叫び声が出て、ボロボロに傷ついたお坊さんが山から降りてきて、イトナを退治したことを告げた。

その証拠として手にはイトナの目玉を1つ握っていた。

以来イトナは再び姿を現すことはなく、村人は安心して山に入るようになった。

イトナとお坊さんが戦った場所には神社が奉られ、そこには今でもイトナの目玉が奉られているという。

そのお坊さんが誰なのかは分からなかったけど、風のウワサでは、都で偉い僧になったといわれている??

この、たまたま通りかかるお坊さんってところがうさん臭い。それにうわさで偉い僧になるなんて、いかにも……よ。

きっと弘法大師や何かにちなんてるんだわ。

「ところが……だ。ここまでなら、よくある昔話なんだが……」

土方さんが続ける。

「その神社のさらに奥へ入ったところに、地元では神隠しの森と呼ばれる場所があるんだ。

古い文献にも、村人が入り込んだまま出てこなかったことがあったらしい。昭和に入ってから何人か行方不明になってる。

6年前D大学の植物研究チームが往絡山に自生する植物の研究をするために、その森に入ったらしいが、その時も2人行方不明になっているんだ。

大掛かりな搜索が行われたらしいけど、靴の1つも見つからなかった。当時の新聞にもちゃんと掲載されてる。

それに去年、民俗史研究で有名だったうちの大学の塚口博士が行方不明になってるだろ？ ウワサじゃ森に入って行く姿を見た人があるらしい。

地元の人はみんな知ってる、その神社の奥こそ、本当に坊さんとイトナが戦った場所だってな」

「私、行くのよそうかな……」

益原さんの唾を飲み込む音が聞こえた。声が震えてる。こんなので怖がるなんて。

「しかし、ま！ それ以後は行方不明になった者はいないらしいし、だいたい塚口博士を見たってのもあくまでウワサだからな。

それにその神社で行われる糸奈祭りはいしなけっこう有名で、来月の毎年7月には、たくさんの人で賑わうんだ。

その中には興味本位や知らずに奥に入る者もいるだろう」
それがわたしたちのことなんだってば。

伝説(2)

「時代と一緒に妖怪も姿を消したのね」

益原さんがしみじみつぶやいてるけど、どっちにしろ妖怪なんているわけない。

新聞に掲載されたなんて言ってるけど、その実物がないから本当かどうかなんて分かりっこないわ。

それに土方さんが自分で言ってるように、塚口博士の件もうわさにすぎないし。

「まあ、明日はそれを知った上で見に行くんだから、ちょっとスリルが味わえるさ」

矢吹さんが笑った時、ドアをノックする音がして女将さんが食事の用意ができたことをつける声がした。

「じゃあ、行くか。タイミングバッチリだな。本当のお楽しみはこれからだぞ」

お兄いが女の子に自慢げに笑う。

大広間だけは冷房が強く効かせてあって、なんだろうと思ったら、各部屋の人数ごとに囲炉裏いろりが作られて、この暑い時季なのに鍋が用意してあった。

暑い夏に冷房を効かせて食べる鍋なんて、なんて贅沢かしら。なるほどね、隠れた名所のわけね。

すっかりあったまった鍋から湯気があがり、昆布のいい香りがする。

鍋は3つあるけど……普通の鍋が2つに、なに？　ずいぶん貧素な鍋が1つある。

「これはこっちでいいですか？」

「すいませんねえ、お客さんなのにすっかり手伝うてもろて」

聞き覚えのある声に振り返ると、犬澤さんが女将さんの手伝いをしてる。すっかり？　って、ずっと手伝ってたのかしら。

「なんだ犬澤、旅館の手伝いしてたのか？」

「今日はお客はオレたちしかないから、仲居さんお休みで、あの女将さん1人しかいなくて準備が大変そうだったからね」

矢吹さんが尋ねると、あたりまえのように答えてる。

「お兄い！　わたしのこと言っといてくれた？」

「……すまん、忘れてた」

「えゝゝゝ！」

「何だ？　明咲季ちゃんどうかしたのか」

土方さんが驚いて尋ねる。

「実は明咲季のやつ、食物アレルギーがあるんだ」

「食べられない物があるなら、よけて食べればいいじゃない」

杉田さんは気楽に言うけど、わたしってば動物性のタンパク質が食べられないのよね。だから家以外で食べられるものって、ホントに限られてる。

家族でもわたしのご飯は別に作られることがあるんだから。

今日はお兄いに任せてたから安心してたのに、どうするのよ。鍋で一緒に煮るだけで食べられなくなるんだからね。

「じゃあ、オレと一緒に食べようか？」

え？　わたしのことを話して困っているみんなとは裏腹に、犬澤さんが言い出した。

「珍しいね。オレと同じアレルギー体質の人なんて。食べない人なら何人か知ってるけど」

「犬澤君そうだったの？」

みんなが驚いてる。そうか、だからお菓子を渡されても食べようとしなかったんだわ。

「うん。だから、先に女将さんに頼んでオレの分は別の鍋に分けてもらってるんだ」

そう言って貧素な鍋を指す。

だから手伝ったりしてそのための鍋用意したのね。

「明咲季、どうする？」

「しょうがないでしょ、お兄いの分の野菜もらうわよ」

「おう、いくらでも持ってたけ」

ふん。

「なんもねえところですが、山の幸は豊富にありますので」

女将さんがみんなの鍋のメインをどっさり持ってくると歓声が上がった。

「これが昨日獲れたイノシシです、こっちがさっき潰したばかりの放し飼いの地鶏ですよ」

山盛りのお肉が隣のお兄いたちのお鍋に次々放り込まれて行く。

それだけじゃない、さらに女将さんが持ってきたのは……川魚？

「川で捕れたヤマメです、幸い今日はたんと捕れましたの」

竹串に刺されたヤマメが囲炉裏に端にならべられると、本当に懐

かしい日本の風景……みたいな光景だわ。

「知ってるか？ ヤマメってもう日本ではほとんど天然物がない

んだが、ここのは正真正銘天然物なんだ」

「すごい！ 来て良かった」

益原さんと杉田さんが歓声をあげる。

理由(1)

「そろそろいいかな、いただきますーす」

お兄たちが鍋をつつき始め、地酒を酌み交わしながら楽しそうに会話が弾んでる。

わたしのほうはまだ女将さんの手伝いをしている犬澤さんが戻ってこないから、先に食べていいのかどうか……もう！ お客さんなんだから任せておけばいいのに。

「ごめん、待っててくれたの？」

頬を掻きながらようやく戻ってきたのは、隣のお兄たちがすっかりでき上がってからだだった。

「すっかり待ちくたびれたわ」

「うん。でも完全に材料に火が通るまでは、これだけ待たないといけなかったからね」

「なに？ 鍋の状態待ってたの？」

「うん。はい、大根煮えてるよ」

平気な顔でそんなこといいながら、取り箸でわたしのお皿に大根を入れてくれる。

「熱っ！ 熱っ……でも、おいし。ちょうど煮えてるわ」

「でしょ？」

笑いながら自分も野菜をお皿に入れてる。まんざら嘘でもないみたいね。

「犬澤さん、お酒は？」

隣では土方さんが飲み比べのようなのやって、女の子を驚かせてるけど。

「オレは飲めないんだ」

ふうん。まあアレルギー体質なんだからそれもそうね。

「おい犬澤、飲め！」

すっかり出来上がった土方さんが、1升瓶を抱えてやって来た。

「ごめん、飲めないんだよ」

「ウソつけ！ 俺は知ってるぞ。お前は飲めないんじゃない、飲まないだけだ。俺が許す！ 今日黙って飲め！！」

完全に酔ってるわね。強要するなんて、たち悪いわ。

「犬澤！！ お前今日はどうしたんだ。せっかく一緒に来たんだから、少しは飲んで楽しめ！」

土方さんなりに気をつかってるんだ。無茶苦茶だけど。

「しょうがないかな。ちょっと待ってて、それほとんど残ってないからもう1本もらってくるよ」

さすがに手伝ってただけあって、犬澤さんはすぐにどこからか同じお酒を持ってきた。

封を開けた土方さんは考えもしないで空っぽだった犬澤さんのドンブリにお酒をなみなみと注ぐ。

「じゃあ土方くん、遠慮なく」

「一気に行け、一気に」

「一気は体に悪いからするべきじゃないんだけど、まあ、いいかな」
つぶやいて一気にドンブリのお酒を飲み干すと、お兄いや女の子から心配する声があがった。

「俺にも注げ、俺にも」

鼻息も荒く犬澤さんに自分のドンブリを差し出して、同じように一気にあおる。

「ふー、どうだ」

「さすが土方くん、まいったよ。気をつかってくれてありがとう。」

オレはもう大丈夫だから」

「うるせえ。もう1杯いけ」

犬澤さんが笑って頭を下げてるのに、さらに酒ビン突き出す。ホントたち悪いわ。

「おい土方、無理強いはダメだぞ」

さすがにお兄いがたまりかねて止めたけど、置かれたドンブリを

犬澤さんにさらに突き出す。

手もともあやしくお酒がつかれ、今度はゆっくりとあおって、半分ほどでドンブリを置いた。大丈夫かしら。

「うーん、もう呑めないよ」

「顔色ひとつ変えないくせによく言うぜ」

そう言いつつも、さすがにそれ以上無理強いさせることなく自分の座っていた場所に返ろうと立ち上がった途端、土方さんのひざがガクツと折れて、ゆっくりと囲炉裏側に倒れていく。

その瞬間、犬澤さんが素早く動いてドンブリを取り上げ、火のついてる囲炉裏の中に倒れないように気を失ってる土方さんの体を支えた。

慌てるお兄いたち、女の子の悲鳴。

でも犬澤さんは平気な顔。

「大丈夫。急性アルコール中毒だから」

それって、毎年何人か死んでるんじゃないの!?

「心配しないでこの場で待ってて。応急処置してくるから」

そのまま1人で土方さんを担いで出ていく。心配しないでって言われても……。

みんな気が動転して、この場で待っててって言われたことに素直に従って待っていると、しばらくして2人が戻って来た。

顔色こそ悪かったけど、土方さんは自分の足で歩いている。よかった。まったく人騒がせなんだから。

「すまん、驚かせた」

バツ悪そうな土方さんに、ようやく場にホツとした雰囲気がある。

「気をつけてね、ここ、隣の村まで行かないとお医者さんいないから。手後れになると命に関わるどころだったよ」

「ああ、助かった」

あれだけのお酒を飲んだとは思えない犬澤さんが心配そうに土方さんを座らせる。

本当に犬澤さんがいなかったらどうなったと思うの？
あれ？
犬澤さんがいたからこうなったのかも知れないけど。

理由(2)

土方さんが無事に戻ってきたことで、場はまた和気あいあいの賑やかな会話に包まれて土方さんはもう魚をほおぼってる。

でも少しは懲りたのか、飲み物はお茶に変えてる。肝心の犬澤さんはもと通り淡々と野菜の鍋を食べ始めた。

「あの、犬澤さん」

「ん？」

「犬澤さん、平気なの？ あんなにお酒飲んで」

「ああ、あれね。胃や腸がアルコールを吸収しなければ吞んでないのと同じだからね」

「え？」

「アルコールを取り入れた時、胃の幽門を閉じて、腸の蠕動運動ぜんどうの動きを止めておけば、どれだけ吞んでも関係ないよ。

必要なくなれば胃に入れていた分を外に出してやればいい。

例えるならこっちの容器に入れておいたものを、こっちの容器に移し変えたみたいなものだね」

笑って答えてるけど、そんなことどうやればいいのかしら。

「……犬澤さんって、どうしてこの探検に参加したの？」

「どうしてって、イトナの伝説はもう聞いた？」

「ええ、土方さんから聞いたけど」

やっぱり伝説知ってたんだ。

「そういうこと。言っておくけど、あれは作り話じゃないよ」

「それって、イトナは本当にいたってこと？ まさか、あり得ないわ」

あったとしても、妖怪なんかじゃなくて、きっと山賊か何かよ。

「ここの民間伝承や神話を調べると、ある一定期間確かに何かがあったことは明らかなんだよ。」

それにD大学の植物研究チームに参加した人に直接聞いたことがあるからね」

あたりまえみたいに普通の顔しながら言うけど、信じられることじゃない。

だいたいわたしたちがポツと行ったところで、何なのか分かるはずなんてないし、分かりたくもないわ。

「それより湖宮さんこそどうして一緒に来たの？ オレが参加するより不自然だと思うけど」

「そ、それは……」

そんなこと、言っても信じてもらえないことじゃない。

わたしが自然世界からそうするよう言われたからだ、なんて……。

この自然世界、この次元はとても微妙なバランスで。全体が保たれている。

このバランスが乱されることは滅多にないけど、偶然あるいは意図的に『異次元』からの侵入で乱されることがあるの。

それは、病原体、ウイルスのようなものに当たると、人に例えるなら、重篤な病気と同じ状態が世界に起こされたと言えるらしい。

だからこの自然世界はそれに対向するために、免疫の役目を持つ突然変異体を創り出すことにしたの。

……それがわたしたち。

わたしたちには異次元からの侵入に対抗できるよう特殊な能力を任されていて、中でも大きな能力を持っている28人は『ふたや』って呼ばれてる。けどなんでそう呼ばれるかは知らない。

本気で能力を出したら精神力・体力ともに500倍は出せる。だけど、いつもそんな能力が出せるわけじゃなくて、その能力が必要となった時だけ出せるようになってるの。

特殊な能力っていうのは、光。分子。空間。電気・電磁波。気圧。温度。重力。音波の8つ。

その中で、わたしは温度を操ることができる。

わたしたちには特定の名前は決まってる。

中には『ツの者』って呼んでる人もいるけど、わたしたちの中で、わたしたちって言えば、それで意味は通じるし必要ない。もちろんわたしたちは外見で見分けはつかないし、普通に社会生活してる。

このことはお兄いも親も知らないし、まだまだ自分がそうだって気づいてない人もたくさんいると思うわ。

わたしたちが次元バランスを修正してる最中は、世界は奇跡を起こしてくれる。次元の矛盾を修正するための矛盾……矛盾してはいけるけど、これまではなんとかやってきた。

呼び出される時は……なんとなく分かる……風にささやかれるって言うのかな。だけど絶対に気のせいじゃないささやきなの。

「いいよ、言いたくないなら。オレの興味本位だけだからね」

にっこり笑った犬澤さんは、もうそれ以上このことは口にしなかった。

お兄いたちがまだ騒いでいる中、犬澤さんは1人で鍋を片付けて部屋に戻っていく。

さてさて、わたしも。

大学生の底なしパワーには付いて行けないわ。さっき倒れた土方さんでさえ、もう元気になってる。もう少しおとなしくすればいいのに。

「お兄い、明日の出発は何時から？」

「ええっと、昼前からでもいいか？」

「意義なくし！」

みんなは上機嫌で賛成した。

変人（1）

この旅館の外観と同じように、味わい深いけどとっても清潔で広いお風呂。しかも1人占めよ1人占め！ から上がって、いい気持ちで部屋に戻ると、犬澤さんの部屋のドアが少し開いてた。

のぞくつもりはなかったけど、ちょっとだけのぞいてみると、ノートパソコンに向かっている。

キーボード叩くのがあんまりすごいスピードだったから、思わず見とれてると、フツと顔を上げた犬澤さんと目が合った。

「湖宮さんだね？」

どうして分かったのかしら？

「ごめんなさい。のぞいたりして」

「いいよ。開けたままにしてたからね。そのドアちょっと建てつけが悪いみたいなんだ」

本当だ、ギイギイいつてる。

「あの……明日の出発、昼前からだって」

「そう、わざわざ知らせてくれてありがとう」

「こんなときまでパソコン持って来て、だけど、ネットで遊んでるようじゃなかったけど？」

「うん。アルバイトだよ」

部屋に入り込んで画面をのぞくと、わたしには理解できない文字が並んでいる。

「何のバイト？」

「新しく発掘された古文書の解読。昨日、県の歴史資料館からの依頼があったね」

「そんなの読めるの？」

「資料館に知り合いがいてね、急ぎのや館内で手に負えない物なんかを回してくれるんだよ」

「へえ……って、すごい！ そんなの読めるんだ？」

「まあ、昔からやってるから。慣れだよ。手間がかからなくていい収入になるからね」

「手間がかからないって……普通は1番手間がかかるんじゃないの？」

「基礎的な文字や言葉のパターンさえ憶えると、世界中の大抵の物は読めるようになるよ。古ければ古いほど共通項が似てくるし」

「パターンなんてあるの？ ひよっとしてそれ覚えると英語のテスト楽勝じゃない。教えて」

「単純に英語だけ覚えるほうが楽だと思うよ」

「いいから教えて」

「古代ヨーロッパからオリエント、シルクロードを通って中国、東南アジアを含めて合計200か国語以上覚えなさいといけないんだけど」

「……普通に勉強するわ」

何なのよ？ この人。

呆れてると彼の携帯に呼び出し音が鳴った。

「犬澤です……はい……はい……」

なんか深刻そうね、何かしら。

「解かりました。ただ、今は往絡山にいるためすぐにはそちらに行けませんので、メールで送ってもらえますか？」

「何だったの？」

「ちよっとトラブル。よそで作ったプログラムがどうやっても上手く動かなくて、こんな時間だから作った会社にも連絡つかない。でも商品納入は明日だから担当者もお手上げらしいんだ」
説明してるうちに、メールが送られて来た。

「うーん。変わった癖だな、ずいぶん複雑なことしてる……」

ひとり言をつぶやきながら、スクロールバーの矢印押しっぱなし……本当に読んでる？

そのまま10分間、最後の行までたどり着くと、頭に戻って画面

をスクロールしながら数か所で画面を止めてキーボードをカチャカチャッと叩いてから携帯を手にした。

「犬澤です、修正しました。直したデータ送り返しますよ。」

これ組んだ人、特徴のある組み方されてますから、ほかのプログラムでもエラーが出る可能性がありますよ……いえ、すぐ解かりましたからサービスでいいですよ……はい……それじゃ」

今の画面、読めてたんだ。だったら電車の中でパラパラめくってた本も……。

「サービスって、今のもバイト？」

「バイトっていうより個人契約かな。プログラムに問題が出た時に急遽直すの手伝ってる。古文献解読よりは割がいいんだよ」

「ふーん」

画面を見るとデータの送り先は不況なんて何のその、いまだに好景気の御子波みこなみグループ本部である。

驚くより呆れた。うちの父さんなんて、そのグループの下請けの会社に働いてて、それでもやっ取り引きできるようになって喜んでたのに、個人契約なんて……。

「そんなバイトってお金どのくらいもらってるか、聞いていい？」

「うん、そこそこだね」

「そこそこじゃ分らないわ、いくら？」

「普通の大学生が稼げる金額より多いと思うよ」

はつきり言わないところを見ると、かなりの額なんだわ。

「そんなに稼いでどうするの？」

「卒業したら貯めたお金で世界中を放浪して周ろうと思ってるんだ。そのための資金作りだよ」

「そんなにバイトして、授業や試験はどうしてるの？」

「普通に講義を受ければ試験のために勉強する必要はないんだよ」

「……必死で勉強してもすぐ忘れるわたしに比べるとうらやましい

限りだわ」

「ごめん。おかしいな、さっきから普段なら言わないようにしてる
ことまで話してる。お酒はすべて流したはずなんだけど、少し残っ
てるのかな」

頬をポリポリ掻きながら、照れ臭そうに笑う姿はカワイイわ。

「言い過ぎついでにもう1ついいかな」

「なに？」

「明日の探検、充分注意しておいてね」

なんだ、ひよっとすると伝説なんて信じてるの？

「資料館に保管してあるイトナの伝説が載ってる本を土方くんが研
究目的で持ち出したんだよ。」

閲覧は禁止してないけど、持ち出す人がいれば、連絡してもらっ
ように頼んでたからね」

「なんで？ わざわざそんなこと……」

今まで笑っていた犬澤さんの顔から笑顔が消えた。

うっ、急にそんな顔してもたまさけないわよ。

「載ってるんだよ、イトナの呼び出し方がね。隠してはいるけど、

読む人が読めば解かるようになってるんだ」

「でも隠してあるんでしょ？ 土方さんが気づいたかどうか分から
ないじゃない」

「さっきの姿からじゃ想像しづらいかと思うけど、彼は優秀な民俗
学者の卵なんだよ。まず間違いなく気づいてる」

「気づいていても、やらなきゃいいんでしょ。危険を承知でそんな
ことするはずないじゃない」

「ダメだよ、彼は危険を認識してない。でないと見にくることさえ
するはずないからね。多少分かったとしても、頭の中で勝手に安
全なものにすり替えてるんだ」

「よくあることよ。物事が大きすぎて判断がつかなくなって、自分
で判断できるくらいのものに置き換えるなんて」

「そうなった人を冷静に観察したことがあるんだね？」

「ニュース見てればイヤでも分かるわよ。「やってみたかった」とか「むしゃくしゃした」なんて理由で人を殺すなんて最悪の例ね。しかもそれが報道されたあとマネする模倣犯なんかも……。

イタズラでやったじゃ済まされないことくらい、分かるはずなのに」

「だけどそれは決してなくならない。1つの大きなインパクトは必ず余波を生み出すから。現に湖宮さん、ずいぶんと憤慨してる」

カチーン！

何よそれ？ 自分だけはそういう事件を見ても冷静に見られるって言いたいわけ？

「ごめんね。わざと誘導質問のかたちをとったんだ。だけど湖宮さんなら、そうした理由を理解してくれると思ったんだよ」

「わたしなら理解できる？ どういうこと？」

「オレたちは明日、間違いなく常識の範囲を超えた事件に巻き込まれる。」

その時に今のやりとりを覚えててくれるなら、理解を超えた事象の中にあって冷静さを取り戻してくれるからだよ。

何が起くるのかは言えないけど、きっとこれが何かの役に立つひとつなんだ」

素直に謝る……本当に申し訳なさそうに謝る犬澤さんに、カチンときた気はひとまずおさまったけど……。

「常識を超えた事件って何よ？ まさかホントのホントにイトナが出るなんて言うんじゃないでしょうね？」

「出てくれないほうが助かるけど、出てくれないならそれで、オレは困るんだよ」

「どういうこと!？」

わけ分かんないわ。

「約束があってね。どうしても果たさなくちゃならないんだよ」

「どんな約束？」

「それは言えないんだ。ごめんね」

うっ、何よその大学生とは思えない純粹っぽい顔は。なんだかいい人なのか悪い人なのかホントに分からなくなってくるわ。

「ま、まあ……話せないんじゃないわ。」

犬澤さんは自分の世界を突き進んで、わたしはそれなりに頑張るから」

「うん……それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

建てつけの悪いドアをグツと引っ張って、ピッタリ閉じると、中からまたキーボードを叩く音が聞こえてきた。

いるのね、わたしたちとは別世界の人って……なんて、わたしが言ってしまう？

変人（2）

部屋に戻って、女将さんが敷いてくれたんだろうお布団に潜り込んだ。エアコンがほどよく効いていて気持ちいい。窓の外からは木々を揺らす風の音が心地好く聞こえてくる。

イトナのことは明日考えよう。今日はもう寝るわ。

わたしは優しい眠りに引き込まれて行く……。

「おはようございます」

午前6時。セミの合唱に起こされ、顔を洗っていたところに女将さんが通りかかった。

「おはようございます」

「朝食はどうされますか？ 他の部屋の方はまだ眠られているようですけど」

まったく、昨日遅くまで騒いでたから。

「作るだけ作っておいて下さい。どうせ昼前まで寝てるつもりでしょうけど」

「でしたらお昼になってから作りましょうか？」

「ダメダメ、それはそれで食べるって言うに決まっていますから。冷めてもいいからお願ひします」

「分かりました」

まったくこんなとこまできて、だらしない都会の若者をアピールしないで欲しいわ。

あら、犬澤さんもまだなのかな。ちょっと意外。

髪をとかしながら廊下を歩いていると、庭に昨日と同じシャツとジーンズ姿の犬澤さんがいた。なんだ起きてたのね。あら、何かやってるわ。

なんだろう？ 不思議な動き、踊り……じゃなさそうだし。

ゆっくりかと思えば急に早くなったり……しばらく見てると、どうも武術らしいことが分かってきた。

「犬澤さん、おはよう」

「おはよう、湖宮さん」

返事をしながらも動きを続けてる。

清々しい朝の空気の中で、初めて見るその動きは舞いのように優雅で、時に激しく鋭い……武術なんて知らないから、どういつているのか、ひと言でいうと、綺麗かしら。

「お待たせ」

「今のなに？」

「日本の古武術の1つで、朝の鍛練なんだ。頭がスッキリするから日課にしてるんだよ」

「古武術？」

「日本で発生した日本独自の武術だよ。友人に継承者がいてひと通り教えてもらったんだよ」

「動きがすごく綺麗だったわ」

「うん。長い年月をかけて完成された武術って、現代の人間工学に共通するものがあるよね。まだ武術のほうが先に進んできると思うけど」

「あー、そうなの？ よく分かんないけど。」

「そうだ。朝食の用意してくれるって、女将さんが」

「ありがとう。準備してから行くよ」

昨夜の大広間に行くと、囲炉裏の火は消してあって、代わりに一人ずつのお膳が用意してあった。

しばらくしてやってきた犬澤さんは、やっぱりさっきのシャツにジーンズのままやってきた……それって、さっき汗かいてるはずだし、そもそも昨日と同じ服じゃないの？

信じられない。

ハッ！ まさかとは思うけどあの荷物の少なさから考えて下着も……今日は少し離れて歩こうかな。

「うわ、朝からすごい量だな」
すごい量？

お膳には炊き立てのごはんに味噌汁、ゆうべ出てた魚の焼いたのと山菜の煮物と漬物。

わたしは魚以外なら食べられそうだけど。

「ま、いいか。じゃあオレは湖宮さんの斜め前に座ることにしよう」
「なんでわざわざひねくれたことするのよ。2人しかないんだから、普通は正面に座るものよ」

「だからやってみたかったんだよ」

子供ぶりを発揮したただけなのね……。でも笑いながら改めて正面に座り直した。

「お替わりはたとありますから、いくらでもどうぞ」

女将さんがニコニコしながらおひつを置いてくれる。

「ありがとうございます、それとせっかくですがこれは下げてもらえますか」

味噌汁と魚と漬物を女将さんに差し出してる。残ってるのはほんと煮物だけ……。

「ああ、そうでした。あら、おみおつけとお漬けものはどうしてですか」

「お味噌汁には鰹とイリコの出汁、漬物にも鰹で味付けがしてあるからダメなんですよ」

「dashimadeダメとは大変ですね。それじゃあ代わりに何か作りましょうか」

「いえ、いいんです。遠慮じゃなくて普段から朝はこのくらいしか食べてませんから」

「えー！ それじゃ足りないわ。わたしもごはんと煮物しか食べられないじゃない。あと汁物1つくらい欲しいわ」

「はい、はい。お嬢さんには、何か作ってきます。ちょっと待ってください」

女将さんが奥に引っ込んで行くのを見送りながらちよつとワガマ

マだったかなと思ったけど、この量だとお昼まで持たないもの。

「でも犬澤さん、見ただけで分かるんだ」

「料理好きでね。どんな料理にはどんな材料が使われてるか解からないと、知らずに食べてアレルギーが出るのはイヤだからね」

「それもそうね。わたしも少しは料理憶えてみようかしら」

「きっと面白いよ」

犬澤さんは無邪気な顔で笑った。

食餌(1)

女将さんが作ってくれた山菜のお吸い物はとってもおいしかった。けど、わたしが先にご馳走さましてるのに、犬澤さんはまだ食べてる。

「犬澤さんって、食べるの遅い」

「うん。よく噛んで食べるようにしてるからね」

「小学生じゃないんだから、今さらそんなにして食べなくてもいいんじゃないの？」

「噛むことは体にすごくいいんだよ。頭も冴えるし、唾液にまじって分泌されるフチン酸って物質には抗癌剤よりも発ガン作用を抑える働きがあるんだ。その上自分から分泌するから副作用なんて一切ないからね」

「そうなの？ でもやっぱりいいわ。わたしは自分のペースで食べるから」

わたしも早いつもりじゃないけど、意識して噛むのって、めんどくさい。

昼前になって、眠そうな目をこすりながら、ようやくお兄たちが起きてきた。

犬澤さんはまた部屋にこもってノーパソでバイトしてる。

それより何？ そのだらしないカッコは。女の子の前なんだから浴衣の前くらい閉じなさい！

それに比べると、益原さんや杉田さんはさすがに着替えてる。うんうん、せめてそうよね。

「おはよー、メシまだ？」

あんたたちは寝て食えることしか頭にないのか？ って思わずいたくなるけど、ここはお兄いを立ててグッと我慢よ。

「女将さんが朝ご飯作ってくれてるわ」

「なんだ気がきかないな、起きるところ見計らって作ってくれてもいいのに」

か、勝手なんだから！

「お婆ちゃん。俺たちどこかでバーベキューしたいんだけど、この辺りでいい場所ある？」

朝ご飯兼昼ご飯を済ませたお兄いが、女将さんに尋ねた。

「ヤマメが捕れた川の少し上がったところに砂地のところがありますよ。ただ、川には充分気をつけて下さい」

「水かさとか足場が悪いの？」

「土地の持ち主の熊谷のじいさんは、ヤマメ捕りの名人なんです、よその人に川に悪さされないかいつも見張ってまして、ヘタすると鉄砲を撃ってくるんですよ」

「べつの場所教えてくれ！」

結局、女将さんからバーベキューの材料を安く分けてもらって、探検部らしく(?)歩きながらどこか場所を見つけようってことになった。

朝と違って、とっくに高くなった太陽の日差しが気温をどんどん上昇させてる。

でも景色がきれい。

それに蝉の鳴き声がすごい。

「とにかくまず、昨日話してた神社に行ってみないか？」

探検なんて言いながら、土方さんがさっそく提案した。

「そうだな、初心貫徹。まずはお願いでもしてみるか。いい場所が見つかりますようにって」

お兄いの意見にみんなが笑う。

だけど1番後ろでバーベキューセットを担いでる犬澤さんは笑ってない。

「どうしたの？」

「土方くん、さっそく呼び出そうとしてるんだよ。真っすぐ向かうってことは、そのままそこでバーベキューを始めるつもりなんだ」
「呼び出すって、イトナ？　でもそんな都合よくバーベキューできる場所があるの？」

それに、どうしてバーベキューがイトナを呼び出すことになるの？」

「行ったら解かるよ、最高の場所だからね。」

土方くんも解かっているんだ、そこがどんな場所なのか。

バーベキューは……湖宮さん、カカシって知ってるよね？」
なによ突然？

「知ってるわ。たんぼに立てて鳥に人がいるって勘違いさせるものでしょ。初めは鳥も警戒するけどすぐ慣れて効果はなくなるけど」

「うん、今はね。昔の……カカシとしての役割が確立する前のカカシって今とはずいぶん違ったもので、効果は充分にあったんだ」

「それってどんなの？」

「畑の中に棒で立てた台を作って、その上に畑を荒らす動物の毛皮や肉を焼いたものを置くんだ。」

すると動物は、自分の種族が焼かれる臭いを嗅いで、怖がって近づかなくなる。

カカシって名前は臭いを『嗅がし』たところからできた言葉なんだよ」

「へー。肉の焼ける臭いがイヤなの？　わたしたちみたいにアレルギー体質なら確かに悪臭だけど、いい臭いって人がほとんどじゃない」

「焼き肉の臭いって肉の焼ける臭いとタレの焦げる臭いのどちらの割合が多いかな？」

「あ、そうか。肉そのものじゃないんだ」

「同じ種族にとって悪臭であることは、仲間を危険から、焼死する危険から回避させる効果に役立つんだ。」

気持ちのいい話じゃないけど火葬場に行ったことはある？　でき

るだけニオイはでないように設計されてるけど」

「……あるわ、お爺ちゃん死んだ時……確かにね。でも、それがイトナとどう……」

「怖がって近づかなくなる反面、そのニオイをかぎ付けてやってくる物もいるんだ。」

街から離れてるこの村には昔から作物を狙うような動物が豊富にいるんだ。

でも普通ならわざわざ人里に降りてくることはないんだけど……ある年に、自然の食物連鎖ではバランスをまかない切れないくらい鹿が大発生したことがあってね。

村の人たちは作物を守るために、盛んにカカシを立てたんだ。鹿を近づけないためと、離れた所に棲む大型の肉食獣、つまり狼を呼ぶためにね。そして鹿害はまたたく間におさまったんだ。速すぎるくらいまたたく間にね。

狼は餌がなくなればもと通りテリトリーに帰って行ったんだけど、誰も気づかない間にやってきた物だけは帰らなかった。餌がくるまでそこで待つことにしようって。

そんな物が、餌がきた合図に何を選ぶと思う？」

わたしに顔を向ける犬澤さん。

言わなくても分かる。イトナを呼び出すための1番効果的な方法は……。

「……肉が焼けるニオイ」

つぶやくわたしの言葉に犬澤さんは黙って頷く。

「伝説が迷信に過ぎないことと、自然からの警告であることの明確な境界線が分かれればいいんだけどね」

「どうするの、土方さん止める？」

「今止めてもやめるはずないよ。それどころか、いつそう好奇心を煽るだけだからね」

「じゃあどうするの」

「始める直前にひと言注意はするけど、無意味だろうから少し手を

打つよ」

「何をするつもり？」

「うん……まあ、何か起こったらとにかく逃げて。麓の神社までたどり着ければ心配ないからね」

え？ 神社までって……そうか、イトナとお坊さんが戦った場所って神社の奥って土方さんがいつてたわ。

で、そこはバーベキューしたくなるような場所。どんなところなのか……。

食餌(2)

「……さーて着いた、伊戸納神社。やっぱりどおってことない普通の神社だな」

周りを見渡しながら矢吹さんが言った。

静かでのどかな雰囲気が漂い、まばゆい陽射しと、より大きな蟬の声がさらに夏の存在感を強めてる。

代表してお兄いがお賽銭箱に10円玉を投げ込んでみんなでお参り。

一瞬だけ厳粛な時間。

「……よーし、お参り終わったあ。

ふわあゝ暑ちいゝ！ ビール！ ビール！ 飲もうぜ！！」

真っ先に矢吹さんが声を上げて、自分で持ってるクーラーボックスから缶ビールを取り出して勢いよくプルタブを開ける。

「ひゃあゝ生き返るゝ！」

それをかわきりに、みんなにビールがまわる……わたしと犬澤さんは飲まないわよ！ もう、昼間っから飲む不良大学生なんだから。「どうだ、このままイトナと坊さんが戦ったって神社の奥まで行ってみないか？」

土方さんがみんなを誘った。

「いいな、行こうぜ！」

矢吹さんも勢いで賛成して、もうこの集団を止める人はいない。

犬澤さんも分かってるはずなのに何も言わずに付いてくる。

……そこはすぐキレイな場所だった。

いつまでも、この景色を眺めていたくらい。

さらに深い山奥から湧き出している清流が美しい小さな瀧を作り、3メートルくらいの絶壁からはじける飛沫がかすかな虹を作って小

さな池になってる。

それがやがて通り道で見た美しい川に流れ込んでいる支流の1つになっている。

池のまん中には島のような小さな中州があって、中央に古びた祠が奉ってある。

「すごい。キレイなところ！」

「いいな、こんなところがあるなんて」

「どうだ？　ここでバーベキューしないか？」

犬澤さんが懸念した通り、土方さんがみんなに提案した。

「いいな、やろうぜ」

「うん。ここなら鉄砲の心配ないしな」

盛り上がってるみんな。でも……。

「……土方くん。解かってるよね？」

「何が？」

「文献読んだよね」

「おお。あれ？　犬澤おまえらしくない。まさか本気で信じてるんじゃないだろうな？」

それを聞いた犬澤さんは何も答えなかった。

バーベキューセットが用意され、炭が焼かれて材料がならべられていく。

わたしはもちろん食べられない。

野菜でも同じ網で焼かれると汁が付くことがあるから油断できないのよ。

「お兄いー、わたしのお昼ごはんは？」

わたしはお兄たちよりずっと早くに朝ご飯食べたんだから、もうおなかペコペコなのよ。

「え？　お前の分は犬澤がどうにかするんじゃないのか？　何も用意してないぞ」

「ええ？！　そんなの聞いてないわよ！　勝手に思い込まないでよ

！」

……とはいえ犬澤さんはお昼どうするのかしら……って犬澤さんは……あれ？

犬澤さんどこ行っただのかな……あ、いたいた。林の中ガサガサ歩いてるわ。何やってるの？

「犬澤さん！！」

林に向かって声をかけると、こっちを見て藪をかき分けながら出てくる。

「どうしたの？」

「あの……お兄いがわたしの分のお昼ご飯、犬澤さんがなんとかしてくれるだろうって、何も用意してなかったらしいんだけど……」

もう！ お兄いの薄情者！！

「え、そうなの？」

キョトンとしてわたしを見る。やっぱり何も聞いてないんだわ。

「そうか……忘れてた」

忘れてた？ じゃあ聞いてたのね。

「お昼にご飯を食べるのが、普通の生活習慣だったの忘れてたよ。」

そうか、湖宮さんも1日3回食べるんだね」

え？ 3回食べるって、普通じゃないの？ しかも忘れてたって

……そっちのこと？

「ごめん、オレと同じ体質ってことで思い込んでた。オレは1日2食なんだ、朝と夕方だけね」

「ええ！ それで体持つの？ それに2食って、朝に食べたのわたしより少なかったじゃない」

「いつもはもっと少ないよ、昨日と今朝は少し食べ過ぎたなって反省してる」

そんなこといわれると、お昼どうしようなんて言えない。それに運動しなくなってから少し体重も気になり始めてるし……。

「うん。まだしばらく時間あるから、ちょっと待ってて」

笑いながらいい残して、また藪の中にガサガサ分け入って行く。

どうするの？　こんな山の中で……。

少ししてから両手に何かいっぱい持った犬澤さんが、またガサガサと戻ってきた。

なんだろう手に持ってるの？　食べ物だろうけど……。

「お待たせ。時期が心配だったけど、わりといいものが見つかったよ」

笑いながら採ってきたものを清流で洗い始めるとみんなが集まってくる。

「なんだ？　犬澤、どこから見つけてきたんだ」

「奥の方に行くと、何本か自生してたんだ」

「なんなのそれ？　わあ、なんか汚い」

益原さんが『汚い』って言った時、一瞬だけ手が止ったのに気づいたのは、たぶんわたしだけ。

「山の芋と呼ばれてる山芋の種類で、栄養価が高いし、精力剤としても効果があるんだ」

今度はお兄たちの動きが一瞬止る。

「それとこっちは木イチゴの一種でニガイチゴ。名前はニガで、実は小さいけど甘くておいしいんだ」

「本当？　もらっていい？」

「どうぞ」

恐る恐る手を出して少しだけかじる。

「あ、甘い。おいしい！」

わたしが言ったとたん次々手が伸びて小さな実がなくなっていく。ちよっとお兄い！　これはわたしのために探してきてもらったものなんだからね！

それ以外にいくつか採ってきた山菜や葉っぱみたいなのを洗って、岸辺にあった大きめの平たい石の上に並べて行く。

「湖宮くん、お皿借りるよ」

「おう、いくらでも持ってたけ」

土方さんがイトナの話を始めているのを横目で見ながら、何も言

わずにお皿を受け取った犬澤さんは、石に並べられた材料に向かって……今まで背負ってた荷物で隠されてたナタのような刃物を腰から引き抜いて取り出した。

「うわあ、犬澤さんそんな刃物持ってたの？」

「これ？ 山に入る時は必需品だからね」

当たり前みたいに言ってるけど、普段なにしに山に入ってるのよ？

「あら、でもなんか変な形ね。ナタとは違うみたいだけど」

槍の穂先のような、コテのような……。

「ウメガイって刃物でね、山ではもってこいの道具なんだよ」

「へー初めて見た」

受け取ってじっくり眺めさせてもらうと、相当年期が入ってて、柄の部分は何度か修理の跡があるし刃もピカピカに磨いてある。

両刃に見えた刃の片方は尖ってるけど刃は付いてない。それにすごく細かく付けられた飾り彫り……。

刃物のことなんてよく分からないけど、なんかすごく高そうな気がする。

「ひよっとすると骨董品？」

「お金じゃ買えないよ」

笑ってウメガイを受け取ると平らな石にしゃがみこんだ。

「ちよっと待ってよ、そこで料理するの？」

石の上なんて……口には出さないけど、なんか……。

「水が飲めるのは確認したけど、やっぱり衛生的に気になる？」

う、うーん……我慢できないわけじゃないけど、なんか断わるの悪い。

といって万が一食中毒になったりするのはいやだし……。

「やっぱ気になるか。しょうがない」

笑いながら荷物の中からこんなところまで持ってきてるパソコンを取り出した。

……どうするの？ 何しようっていうの？

「ああ！ そんなー！！」

彼は閉じたパソコンの上蓋をまないた代わりにして採ってきたものを刻み始めた。

「ちよっと……ちよっと待ってよ。何考えてるの」

「え？ 少しはマシかなって」

「石の上で切ってくれたのでいいから！」

「そう？ わりと豪快なんだね」

今の豪快さにはかなわないわ。世界で初めてなんじゃないかしら？ パソコンをまないた代わりに使おうとしたのって。

お兄いたちから少し調味料を借りてできあがった料理は……わあ、綺麗……持ってきた時の土まみれだったの信じられない。

「材料が限られてるから、これだけの種類しか作れなかったけどね」
3つのお皿に盛られた料理が簡易式のテーブルに運ばれると、お兄いや女の子の驚きの声や歓声があがる。

「手前にあるお皿が、さっきの山の芋を使った物だよ。

焼いてホクホクにしたものと、生で短冊に切ったのとおろしたものの。ホウキの実とよく合うんだ」

余計なことじゃないの！ またわたしの分が減るでしょ！！

「この飾ってある花は？ これも食べられるの？」

「うん、ヤブカンゾウの花だよ。酢の物にするとおいしいんだよ」

本当、歯ごたえといい味といいおいしい！ 最高！ これが食べられただけでもきてよかった！

他にも野生のアケビやウワバミ草っていうのなんかがあって、お兄いたちどころかバーベキューの準備してた女の子たちも集まってまたたく間にその料理を平らげられた。

結局わたしにまわってきた量は少しだけ。

うー、この大食いたちの胃袋には負けるわ。

出現（1）

そんな料理のことで、すっかりイトナのことを忘れていた。ここでバーベキューをしようと言いだした土方さんでさえ、この時は忘れていたと思う。

ガシャーン！！　っていきなりもの凄い音がした。

音に驚いて何が起こったのか分からなかった。

「きゃあああ！」

益原さんが悲鳴をあげて見つめるその先はバーベキューのセットがあった場所。

すでにいくつかの材料が置かれてあったはずだったのに、なんにもなくなってる。

そう、何もかも。

大きなセットがまるごと消えてる。地面には無理矢理引きずった跡が……。

跡を目で追うと、池の中に見えない何かの力で引っ張られて行くセットの姿があった。

もしあれが人間だったら、伝説通り痕跡さえ残さないで消えることになる。

イトナ？！

頭をよぎる。恐ろしきで体が動かなくなってた。

「みんな逃げろ！！」

犬澤さんの叫びに我にかえった。

「バラバラになるな、固まれ！」

もう誰が叫んでるのか分からない。

わたしたちはパニックになりながら、一刻も早くここから遠ざか

ろうと走ってた。

その時。

《協力してあげなさい》

頭の中で声がささやいた。

これは、自然からの意思！

そのとたん、わたしのパニックはおさまり、逃げるお兄いたちを見送って振り返る。やっぱり犬澤さんはいない。

もとの道を引き返す。

『ふたや』の中でも最速のスピードを誇るわたしが祠の場所にたどり着くと、犬澤さんは目に見えない何かと戦っていた。

よかった生きてる。

「おほかむつみのかみ

オホカムツミノカミ

おほかむつみのかみ

オホカムツミノカミ」

叫びながら、手に持ったウメガイを振りかざすと、水面がザバーツと波打ち、周りの草がザザツとなぎ倒される。

今のわたしには見える。彼と戦っているモノが。

《喰わせろ、喰わせろ、喰わせろ……》

《ひもじい、腹がへって死にそうだ……》

《もつと美味しいものが欲しい、もつともつと喰いたい……》

それは『餓鬼^{がき}』と呼ばれる霊界でも最下層に位置する残留思念体。イトナじゃない。それとも、この餓鬼たちがイトナと呼ばれる妖怪の正体だったのかも知れない。

手に持ったウメガイが振り払われると同時に、何体かの餓鬼が水面に弾き飛ばされて、水しぶきを跳ね上げたり、地面に転がったりしてる。

でもすぐ立ち上がってまた彼に向かって飛びかかっている。

妖怪なんて信じてなかったんじゃないかって？　もちろん信じてないわよ。お化けも妖怪も。

だけど、次元バランスを護る者でいる間だけは、『何かの要因で現実に影響を及ぼすことができるエネルギー体』の存在は認めてるの。

だって……そんなのが普段からいるなんて思うと怖いでしょ。どっちにしろこの程度の餓鬼なんて、わたしの敵じゃないわ。

世界から受けてる高い波長を餓鬼に向けて解き放つと、餓鬼たちはあわてて逃げたり、浄化されて消えてく。

ふふん。少し本気になればこんなものよ。

「湖宮さん?!　どうして戻ってきたの」

あら、せっかく退治してあげたのに、それってずいぶんじゃないかしら。

「何言ってるの、わたしがいれば100人力なのよ」

「さっきの餓鬼魂^{がきだま}は、イトナの注意を引きつけるために呼んでオトリだったんだけど」

え!　それって……ジャマしたってこと?

「キツイかな、オトリ無しでやるのは。今から呼ぶにしても時間がないし」

彼の額から汗がしたたり落ちる。それが暑さだけじゃないってことは……わたしでも分かる。

「林の中で餓鬼界に通じる黄泉路^{よみじ}を一瞬だけ開いて呼び出しておいしたモノがさっきようやく出てきてくれたんだ。

バーベキューのセットが引きずられたのはなかなか効果的だったんだけど。とにかく湖宮さんは早く逃げて。そのくらいの時間ならかせぐから」

手を打つってこのことだったのね。でもわたしを逃がしたあとの時間はどうするの?

「ダメよ。わたし指示されたの。犬澤さんと協力して魔物を封じるようにって」

「え？」

「ダイジョーブ。いざとなったら、わたしが犬澤さん守ってあげるから！」

にっこり笑ってウインクしてみた。驚いてわたしを見つめる彼の表情が少し気持ちいいわ。自信はあるのよ。

「こうなったら隠しててもしょうがないから言うけど、わたし特別なの。」

自然世界で次元バランスに異常が起こった場合に、それを治すことができる能力が備わってるの。ちから

今回は次元は関係ないけどささやきがあつたからには、わたしの能力が必要ってことよ。

普段の生活に使うことはないし誰にも……同じ能力を持つてる人以外には知られてないけど、単純に力だけなら本気になれば大人472人分の力はあるのよ。

これなら文句ないでしょ？」

「次元バランスってなに？」

「この世界そのもののよ。平面や立体の2次元3次元じゃないわ。」

地球をまるごと1個の生命に例えるのと同じで、この宇宙まるごと1つを生命って考えるの。

それを1つの次元って考えて、異次元は切り離された違う生命体からの存在ってこと。バランスが崩れるのは、この生命体の中に違う生命体が入り込んで、体調が崩れたのと同じことなの」

「病原体や悪性ウイルスに対する抗体や免疫反応の役割を持つてることだね。」

ささやきは誰から？」

「誰ってことはないわ。世界そのものが話しかけてくれると思うの。」

だけど幻聴なんかじゃない。はっきり意思をもって指示してくれるのよ」

「その役割はどうやって自覚するの?。」

「ある日突然自分がその役を持っていることが分かるみたいよ。

人によっていろいろあるけど、わたしの場合、陸上の練習中に倒れた時に運ばれた救急車の隊員がその役目を持つ1人だったの。

わたしのことに気づいたその人が、その役目を持ってる仲間の所に案内してくれて自覚したの。

これでも1600人の中で特に大きな能力を持ってる28人……『ふたや』って呼ばれてる。

まだその上に4人、わたしたちでも手に負えない場合に呼ばれる人はいるんだけど」

ちよっと自慢。

普通このことは人に話さないんだけど、協力するように指示があったってことは話しても大丈夫な人のはずだわ。

「へえ……ふふ……そうか」

でも特に驚いた様子もなく、目を輝かせながら寄り目がちにゆっくり視線を下げて笑ってる。

何かしら？ 好奇心旺盛な子供が何かを発見した時のような笑いみたい。

「だとすると湖宮さんの下に196人。たぶん『ももここのむゆ』の人たちとさらにその下に1372人の『ちみななふた』

うん？ ちよっと語呂が悪いな、『ちよみ……』いや、この場合『ちのみななふた』って呼ばれてる人たちがいるんじゃないかな？」

出現(2)

あっけに取られた。驚くなんてものじゃない。やっぱり犬澤さんっておかしいわ、もう断言する。

「その通りだけど、どうして仲間でもないのに分かるの？」

「総合計は湖宮さんが言った1600人。

君の上に4人いて、次に28人。

4人に対して各7人ずついるからその下にまた各7人ずついるとして196人。

さらにその下に7人ずついればちょうど1600人、その数になる。

でも正確にはもう1人、族長の役割をする人はいない？

いるなら『ひ』と呼ばれてる？

それともその役割をしているのがささやきを送ってくれる存在なのかな？」

「はつきり言われてるわけじゃないけど、そうかも知れないってウサダとそう呼んでる人もいるわ。

だけど、そんなことまで分かる犬澤さんの頭の中どうなってるの？
ううん、それよりこんな話いきなり信じるっていうのがそもそもおかしくない？」

「こんな時にわざわざそんな話をするために戻ってくるほうが無理があるよ。

それなら事実と考えるほうが話が早い。

その上で話にいくつかの仮説を立てて理論的に筋が通ればそれでいいよ」

「それでいいって……理屈さえ間違っていないなら、簡単に詐欺に合
いそうな勢いね」

「大丈夫だよ、オレ悪人だから。」

それより、イトナはもう目の前にいるんだけど。湖宮さんにはそれが見える？」

悪人って……自分でそんなこという人ほど危ないのにつて、言っ
てられないわ。

イトナがもう目の前にいるの？

正面を指す犬澤さんの先にあるのは……瀧と池、池の真ん中にある
小さい島と何本かの木々、そして祠。

何も変わったものは見えないけど……。

「誰にでも見えてたんだよ、最初からね」

……最初から見えてたの？ つてことは今見えてる中の何かがイト
ナってことね……それなら、1番怪しく思えるのつて……やっぱり
祠ね。あれだけが人工のものだし。

「祠でしょ、あれがイトナなんだわ」

「残念、それじゃ喰われて行方不明。だから心配してて、すぐに解
かるよ。」

思わず話し込んだから、もう湖宮さんを逃がせるだけの時間もな
いからね。やるだけやってみるよ」

その時ものすごいイヤな感じがした。

なに？ この感覚って気持ち悪い。うう……なにがくるの？

「きた！ 足もと！」

犬澤さんが叫ぶと同時に、振り返ってわたしを抱き上げジャンプ！

今までわたしたちが立っていたところが、まるで口をパカッと開
いたかのように割けて大きな牙が突き出す！

……これって、どうなってるの。

犬澤さんはわたしを抱えたまま、数メートルの距離を飛んでた……
人間技じゃないわ。

次元バランスを守る仲間つてわけでもないのにどうして？ いけ
ない。このままだと足手まといだわ。

「分かったわ、今みたいに飛んでよければいいのね。降ろしてくれ
る」

「下からの場合はね。」

イトナっていうのは『この空間』なんだ。

いってみればオレたちはイトナの内部にいることになるんだ」

「空間を擬態？ そんなのって……」

異次元生物でも聞いたことないわ。

「とにかく、今のわたしは運動神経だけなら犬澤さんよりいいから次は助けてくれなくていいわ。様子見て対策練りま……」

「右！」

反射的に左右に散ってその場を離れる。

右側の空間がガバツと開いて、今度も牙のようなのがガチツと空間に噛みつく。

「あら、丈夫そうな歯だったわ」

「うん、でも人生最後の言葉がシャレだったってのはできれば避けたいね」

あはは……笑ってられる間に笑っておこう。

「来た、湖宮さんの上！」

しゃがみながら地面を蹴り、犬澤さんまでの距離約3メートルを一気に飛ぶ。

振り返った瞬間、巨大なクチバシが見えた。

「どうして犬澤さんには、イトナの動きが分かるのよ？」

「ウメガイだよ。これがイトナの動きに反応してくれるんだ」

「そんなの1人で持つてるなんてズルイ！」

「他にはないんだ。それにこれを湖宮さんに渡しても、まず使えない。

オレもかなり訓練して……下から！」

ガバツと獣のような口が足下から突き出る。

「このままじゃラチが開かないわ、イトナを倒す方法は？」

「目を潰すんだ。伝説でも坊さんが片目を持って降りてきたよね、1つは失ってるから、もう1つ潰せば動きを封じることができる。その隙にもう1度、今度は本体を完全に封じ込める」

「目が2つって限らないんじゃないの？」

「空間から出てくる生き物の口を見る限り、2つ目の生物ばかりだからたぶん大丈夫。もし違ったら、運が悪かったとも思ってたあきらめ……きた、正面！」

巨大な口が目の前に開く……それは、人間の口。

「それで！ その目はどこにあるの？」

分かってるんだったらさっさと片付けちゃいませよ。それが1番よ。

「それが解からないから困ってるんだ」

えくくくく！？

能力(1)

「どうするのよ!？」

「とにかく周囲を観察するしかないよ。

常にオレたちを見つめてる何かがあるはずなんだ、それを見つけて、うわ!」

犬澤さんをめがけて、空間から魚の口が飛び出した。

わああ、離れて見るとすごい。背筋がゾツとする。絶対食べられたくないわ。

とにかく目を探すことね。それしか助かる道はないもの。っていつてもそんなものどこにあるのかしら？

目らしいものなんて何も……。

「後ろ!! 湖宮さん!」

反射的に飛び上がって避けたら、10メートルくらい上の空間で、ボヨンとした何かに突き当たって跳ね返される。

きゃあ! このまま落ちれば食べられるわ!

無駄なの分かってたけど、必死で手を伸ばすと膨らませた風船のような感触が何もないはずの空間にあった。

何よ? これ。

よく分からないまま空間にしがみついて口が引っ込んでいくの待って、地面に着地。

「空に柔らかいものがあつたけど、なんなのかしら」

「それがイトナの体の外側部分に当たるところ。この空間全体が覆われてるんだ。

触れるのに物理的じゃないのがやっかいだけどね」

「力づくじゃ破れないの?」

「例えば人の心は物理的に潰せないのと同じだよ。心理的な攻撃だとあっさり潰せるんだけどね」

こんな時に笑い事じゃないことを……。

「また来た真下!!」

犬澤さんの声と同時に飛んで逃げる……はずだったのに、あっ!　と思う前にわたしは足を取られてた。

ここがイトナの中だってこと忘れてた。足下の草がいつの間にか結ばれてるなんて思いもしなかったもの。

こんな所で死んでたまるもんですか!

だけど、体がスローモーションで落下していく……。

「飛んで!」

その時、犬澤さんがわたしの体を抱えて、大口を足でつつかえながらわたしを放り投げた。

ちよっと待って、犬澤さんはどうするの?

宙を飛びながらわたしは左手を大口に向けた。

ええいっ!!

大口を中心に周囲が真っ白な色に包まれた。

わたしの能力。

世界を護る者として、自然から操ることを許されているもの。

温度。

わたしは摂氏3000度からマイナス2000度まで操ることができる。

凍りついた大口から犬澤さんが脱出する。やっておいてなんだけど大丈夫かしら。マイナス50度で凍らせたんだけど。

バキバキ音を立てながら、大口が地面に姿を変えて行く。まるでコンピュータグラフィックを見てみたいね。

「襲ってくるイトナの口を凍らせることは連続してできる?　有効範囲は?」

なんの疑問もなくわたしの能力だって受け入れて、注意深く周り

の様子を伺いながら犬澤さんが尋ねる。

「範囲は半径50メートル以内ならできるわ。何度でもできるわよ」
「次に出てきたら、できるだけ低温で凍らせて。」

上手くいけば一部分でも退治できるし、そうでなくてもこれまで1回につき1つずつしか襲ってこなかったことから考えて時間かせぎにはなるからね」

「分かった、やってみる」

……だけど、妙な間があいた。

さっきまでは次々襲ってきてたのに、わたしが凍らせてからはなかなか襲ってこない。

「どうしたのかしら。まさかわたしに恐れをなしたとか……」

「ありえるね。突然の反撃に警戒してるんだと思うよ。ただ、そのほうがよけい怖いけどね」

油断なく周囲を見渡しながら答える犬澤さん。

少しくらい安心させること言えないのかしら……あ、また違和感がある。近づいてきてるんだわ。

「ほらきたみたいだ。今度のはかなり大きいね。」

注意して。飛んで逃げたところがまだ口の中ってこともあるから「分かってるわ、犬澤さんこそ気をつけて」

「うん。ありがとう」

違和感が強まったり弱まったり……警戒しながら、それともフェイントなのかも知れない動きで少しずつ近づいてきてる……。

「きた！ 右の正面！」

わたしの斜め前からこれまでよりはるかに大きな口が飛びだしてきた。

大きすぎて分かりづらいけど猫の口！！

一気にマイナス200度。

わたしの操れる1番低い温度で口を凍らせて動きを止める。

今度はそう簡単に溶けないわよ、無理に動こうとするとコナゴナ

になっちゃうもの。

「まだだ！ 反応が残ってる！」

え？ まだ？

そのとたん凍りついたオブジェがガラスのように割れて、中からこれまでと同じサイズの凶暴な口が飛び出して……！

能力(2)

驚いて反応できなかった。

棒立ちのわたしに凶暴な口が迫る。

もうダメ、今度こそダメだわ。

ドゴン!!

鈍くてすごい音が響いた。

犬澤さんが走ってきて、大口の直前で1回転して頭……といえるかどうかは分からない……に踵蹴りを決めた音。

朝に見せてくれたなんとかって武術の技だわ。

大口はその勢いで地面に叩きつけられてる。

そうだ！ 凍らせなきゃ。

地面に溶け込んでしまう前に、もう1度ガチガチに凍らせる。今度は上手く行ったわ。

「ごめんなさい、わたしまた……」

「無事で良かったよ。今のうちに目を探そう」

あ……ん、情けな……い。なんで世界から選ばれたわたしより犬澤さんの方がすごいのか？

しかもちつとも嫌味じゃないなんてズルイわ!!

なんて言っても始まらない。目よ目。それを見つけるのが肝心よね。

大口を横目で見ながら周囲を見渡すけど……だめ、分からないわ。大口からギシギシと嫌な音が聞こえてくる。怪物でさえなければ日の光を反射して輝く不思議なオブジェなんだけど……それに、これのおかげで涼しいし。

「勘でいいから、湖宮さん適当に指してみて」
背中越しの犬澤さんが言いだした。

「え〜〜、わたしぜんぜん分らないわよ」

「いいよ。こんな時は女の人の直感を信じる方が確率が高いんだよ」

「あ、それってジンクス？ それとも差別？」

「雄と雌を分けて、同じ危険にさらした場合、雌の方が回避率と生存率がずっと高いんだ。」

「種族保存には雌の方が重要な役割を持ってるし、遺伝子の複雑さにおいてもはるかに雌の方が優れてるからね。」

「雄にない危険回避能力が備わってるのかも知れないね」

「……はいはい」

「味もそっけもない。だいたいメスとかオスとかいわないで欲しいわ。」

「あの木のコブなんてどうかしら」

「あやしそうなところを指さすと、わあ！ 一瞬で飛んでコブにウメガイが突き刺さ……らないでブヨッとへこんだ。」

「違った。他には！」

「え？！ ええっと……。」

「祠の右横に生えてる木のちょっとした裂け目」

「カッーンとウメガイが刺さる音。」

「ひよっとしてナイスヒット？」

「違う、音だけ。次は！」

「瀧の中。水辺の平たい石。バーベキューセットが引き込まれた辺りの水中……。」

「次々外れる。どれなのよお〜〜！！」

「そろそろ大口がくる！！ 気をつけて」

「あ！ 目のことばかりに気が行って、口のこと忘れてた。」

「わああ、もうほとんど地面に溶け込んでる。」

「危なかったわ。」

「またどこからか現れるのを待つ緊張感……じわじわと忍びよる違和感。」

「オレの真後ろ!!」

自分で叫んで飛んで逃げる犬澤さん。空間から生える鋭い牙を持った口を再び氷点直下。

「どうするの？ わたしもう思いつかないわ。ねえ本当に祠は関係ないの？」

「うん。あれはアシカセって言って、イトナをこの空間に縛りつけておくものだから、逆にあれを壊すと收拾がつかなくなる」

「そうなの……ところで関係ないかも知れないんだけど、襲ってくるのって足下から多くない？」

ひょっとして見てるんじゃないかって、わたしたちが立ってる触感で感じてるってことないわよね」

「足下から……そういえば……」

ふっと考える仕草をしたとたん大きく目を見開いてわたしの顔を見つめる。

なに？ なに？ 今度はどこから出てくるの！

「そうか！ 目だよ!!」

いきなり、でも、いまさら何を叫んでるのよ。

平等（1）

「なんてことはない。目だ、目そのものなんだ」

だから一体なんなのよー！！

「この地形！ 林に囲まれて、池があって、真ん中に島。目の様相そのままなんだ」

あ！ そうか！！

「だったらわたしたち、今まで探してた目の上で逃げ回ってたってこと？」

なんかカッコ悪い。灯台なんとかってそのままじゃないのー。

「いや、それも違うよ。そう思わせるための引っかけなんだ。

過去にそれに引っかけられて喰われた人がいる。まさかそんなこと思う人がいるなんて思いつきもしないだろうからね」

「じゃあ本当の目はどこにあるの？」

「世界中で目といえればほとんどが共通して上げてるシンボルがあるんだ……それは！」

犬澤さんが助走をつけて飛び上がった。

祠の真上。空に向けて……。

《ヴオオオオオ……！！》

鼓膜が破れそうな叫び声とともに、周囲の光景がフラッシュする。かろうじて開いた目に映る光景は足下や林の木々、絶壁の岩にいたるまですべて動物の死体に囲まれていた。

美しい清流は血の流れに変わり、死体の中には人間のものもあった。恐ろしさで顔を伏せ、その光景を見ないように固く目を閉じる。

「あふら ひゃくくらいとく こゝは しき！」

不思議な歌が聞こえてくる。この声は……犬澤さん。

頭を上げ、うつすらと目を開けると、『しき』のところでウメガイを上から下に降り下ろす動作と同時に、恐ろしい空間がビクツと反応した。

それは死体に囲まれているというより、囲まれている風景が映しだされているみたい。

あまり見たくないけど、少し落ち着いて周りを見渡すと……そうだわ。これは実物じゃない。

「やふら　ちやくえいもく　こゝは　しき！」

今度は左から右に薙払う。さっきより強い反応。

「わふら　きやくていそく　こゝは　しき！」

上から下。

「なふら　にやくへいよく　こゝは　しき！」

左から右。

「たふら　しゃくけいほく　こゝは　しき！」

「まふら　りやくせいのか　こゝは　しき！」

「さふら　ゐやくめいおく　こゝは　しき！」

「かふら　みやくねいろく　こゝは　しき！」

上下左右を交互に繰り返しながら歌を唄い、そのたびに空間が苦しそうに反応している。

「ぬゑつ　むをすゝゆるゝ　うん！」

最後の歌と同時に、ウメガイを真っ直ぐ正面に突き出すと、周りの光景が死体からこれまでわたしたちを襲っていた無数の口に変化して一斉に突き出し、物凄い断末魔の叫び声をあげる。

その声にわたしはまた耳を塞いで顔を伏せた。

悲鳴が消え去り頭を上げると、もとの清々しい自然の景色の中に、犬澤さんのウメガイを構えて仁王立ちする姿が目に入った。

「あとは……」

祠の前まで歩いて行って、荷物から取り出した白い粉をパラパラ

降りかけると、ゆっくり祠が崩れて行く。

平等（2）

「清め塩だよ、知り合いの本物の霊能者に物質化してもらったんだ。これまで物理的にイトナを封じ込めてたアシカセを霊的に変えてやればもう物質世界に干渉できなくなる。

それにしても、昔イトナを退治した坊さんってすごい人だったんだね。

オレたちが2人がかりで、しかも片目。遠近感のない状態のイトナにこれだけ苦勞したっていうのに。

このアシカセを作ったのもその坊さんだと思うけど何百年って時間が経ってるのに、今まで封じ続けてるんだから」

わたしに聞かせるわけでもなく、ひとり言のように犬澤さんはつぶやいて、ずっと地面に見慣れない漢字を書いた。

「イトナね、『埜』^{いとな}って書くんだ。

『墓』っていう意味でね……確かにたくさんの生き物を喰らってきた妖怪かも知れない、でも同時に喰われた生き物たちの墓場だったのかも知れない。

喰われたくない、死にたくないって思いが生みだした想念としてのね。

喰う側と喰われる側。

とても不公平な関係でありながら、種族全体、生物全体を通して考えると、どちらに対しても繁栄するように作られた自然の高度な社会システムとして成り立ってる。

どちらが良い悪いなんてことじゃなく、人間が干渉さえしなければ1つのニッチとしてその地域において完全ともいえる形で成り立つんだ。

その中に割り込む人間は……いや、これは仕方ないことなんだろう

うね。

今はその時期だから。

『瑩』って文字ね、『営いとなむ』と同音同意でもあるんだ。

日々の営み……生物にとって生きて行く上で最も関心ある行為、『食』の行動と同じなんだ。

毎日が食べるか食べられるかの食物連鎖……」

「……イトナの目って、なんだったの？」

「目が見えるためにはなくてはならないもの、そして湖宮さんが教えてくれた地形としての目が見つめてたもの。

世界のどの宗教でも共通してる目のシンボルがあるんだ。当たり前すぎて見落としてたよ」

彼が指す先には、真夏の太陽が強い日差しを輝かせていた。

「坊さんとイトナが戦った時は、おそらく太陽と月が一緒に出てたんだと思うよ。

日本の神話でも月は右目、太陽は左目とされてるからね」

手で影を作って本物の太陽を仰ぐと、緊張で忘れかけていた暑さが戻ってきた。

「さて、そろそろ限界だ」

今まで元気だった犬澤さんが、ヨロヨロ木陰に歩いて行ってペタッとしたらしく座る。ま、いいかあれだけ動きまわったんだもの。疲れて当然よね。

それにしても彼ボロボロ。なりふり構わず逃げ周ったんだから当然だけど、あちこちから血もにじんでるし。

わたしのほうは……気にしない。着替えたくさん持ってきて良かったわ。

少しは疲れたけど、世界から分けてもらうエネルギーのおかげでほとんど回復してる。

だけど、わたしも隣に一緒に座ることにした。

悲鳴

「……塚口博士にイトナの伝説と呼び出し方を教えたのもオレなんだ。ネットで知り合いになってね。」

まさか博士が本物の山の民の末裔……それも妖怪や魔物を退治する、退魔業を専門に行なったカグツチと呼ばれた一族のアヤタチ……族長の血を引かれてたなんて知らなかったし、当然教えてくれなかったからね。

このウメガイも普通のものじゃないよ。

確かにシンボルとしての意味合いも有るけど、実用性はもとより、密教系信仰で重要視される法具の意味合いの方がはるかに強いし、現実^ニこれを受け継いだ者はその使い方をしてる。

もっと早く気づくべきだったんだ。

古事記に載ってるイザナミノミコトのホトを焼いて産まれ、イザナギノミコトに体を切り刻まれた、^{かぐつちのかみ}迦具土神。

現実への現われの1つとして、過去に2大勢力がはびこった時代があり、その片方から派生した1つの種族が、もともとの勢力を滅ぼすほどの勢力にまで台頭した結果、もう一方の勢力に攻撃を受け、その一族がバラバラに……少なくとも10の部族が滅ぼされ、残り8つの部族が日本中に散らばった歴史があったのかも知れない。

その中で本家的な役割を持った一族『カグツチ』……並べ替えれば明白だったし『私は一族の最後の1人なんだ』といわれた時にもっと深く考え及んでいれば……。

これは『ツカグチ』博士の形見なんだ。

行方不明になったって聞いて、すぐここに駆けつけたんだけど……焦げた肉の固まりと、祠の前に突き刺さってたこのウメガイだけが残されてた。

たぶん地形が目似てることから引っかけにかかってしまったん

だろう」

手が白くなるほどウメガイを握り締める姿には、なんて言っていないか思いつかない。

「行方不明になってから1週間後にメールが届けられたんだ。

これが届く場合には、自分の身に何かが起こっているということだろうってね。

送られてきたメールの中に、さっきの歌と音階が残してあった。もしもの時はあとを頼むって。

大学を卒業したら世界中と一緒に周る約束をしていたのに……。

そしてその博士の犠牲がなければ、オレも同じように引っかけたところだ。亡くなられて、なおオレを助けてくれたんだよ。

博士。これは確かにオレが受け継ぎますよ。オレ自身の戒めのためにも。

そしてオレが将来、世界を周る時には必ず持つて行きます」

祠の残骸にウメガイをかざしながら、静かに、でも力強くつぶやいた。

「湖宮さん」

「え！ なになに？」

森から神社へと続く藪を歩きながら、犬澤さんが話しかけてきた。さっきの博士の話で雰囲気暗くなっていたから、わざと明るく返事する。

「オレの用は済んだからこれで帰ることにするよ。

それと……オレ1人だったらとても生き残れなかった。戻って来てくれて、助けてくれて本当にありがとう」

これまで見たこともない、本当に眩しいくらい笑顔。

「受験勉強で質問があったらなんでも聞いて。携帯はいつも持っているし、番号はあとでメモ渡すよ」

「やった！ 試験中に問題いうから、答え教えてもらおうかしら、

な〜んてそれはダメね……ありがとう」

麓からはお兄いたちが村の人を連れてやってくるざわめきが聞こえてくる。

やっぱり世界がお兄いたちを巻き込むのを止めていたんだわ。

「お兄いー！」

先頭を必死な顔して登ってくるお兄いの姿に手を振ると、もっと必死になって登ってくる。

「明咲季！ 無事か！！」

「きゃあ！ ちょっと、やめてよ！」

いきなり抱きついた手は振り払ったけど、ひっぱたくのはやめておいた。

「犬澤！ 大丈夫だったか！」

「すまん、俺たちだけ逃げたこと気づかなかった」

土方さんと矢吹さんもきてくれていた。

女の子たちはいない……って当然よね。

「みんな無事でよかった。心配かけてごめん」

「あんたらも無事でよかったの、何があったんだあ、さっきの恐ろしい叫び声はなんだ？」

消防団のはっぴを着た村の人たちが心配そうに集まり、駐在さんがわたしたちの無事無線で告げる。

一団がホッとして帰りかけた時……。

「うわああああ！」

列の後ろから叫び声！

何？ まさかまだイトナが？！

一同が振り返り、叫び声があがったほうを見る。

「うわあ！」

「ひゃあああ！」

続けざまに上がる悲鳴の連鎖。

いつ持ってきたの?! ずっと持ってたの?!

「これも神社で奉ってもらえないですか?」

悲鳴の中心に立つ犬澤さんは、笑いながらイトナの左目を手にしていた。

連鎖 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5706u/>

連鎖??次元バランサーシリーズ??

2011年7月19日03時22分発行